

三人の伝令

中村天風先生の「三人の伝令」の話です。

日露戦争当時、二〇三高地での話ですが、その頃はまだ無線のようなものはありませんから、伝令を出したのです。しかし途中で敵の弾に当たって死ぬこともあるので、伝令は必ず三人いた。

乃木大将のところ、たまたま天風先生がおられたんですけど、一人目の伝令がやって来て馬から下りようとした途端、敵の弾がスポンと大腿部に当たって転げ落ちた。その伝令はもう痛い痛いとのた打ち回っていて報告にならなかったというのです。

次に二人目の伝令が飛んできた。馬から下りるときに今度は胸を狙撃されて、そのまま人事不省。

三人目の伝令にはようやく弾が当たらずにようやく無事に報告することができたのです。

その日の夕方、天風先生が心配して、野戦病院に行って「あの二人はどうした」と聞いたら獣医が「いや、残念ながら一人死にました」。「そうだろうなあ、胸撃たれたんじゃあしょうがねえよな」。

すると獣医は「いや、大腿部を撃たれて痛い痛い泣きわめいていたほうが結局、出血多量で死にました」と言ったというのです。

—胸を撃たれたほうは生きていたのか—
生きていた。

天風先生がその人のところへ行って「おい大丈夫か」と尋ねると、「大丈夫です」と答えた。そして「これくらいのことで死ねますか」そう言ったそうです。この人は結局日本に帰って七十何歳まで生きました。

それでよく天風先生が「嘘でもいいから大丈夫だと言ってみろ」と話しておられた。
— 前向きに考えると運が拓ける。まさに人生そのものです —